

教会月報

No.519 (2022年3月27日)

【2022年4月号】

日本キリスト教団埼玉和光教会
〒351-0114 和光市本町 15-50

「解放と自由」への旅路

岩河 敏宏

ペトロの手紙一 1章 23節～25節

23 あなたがたは、朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変わることのない生きた言葉によって新たに生まれたのです。24 こう言われているからです。

「人は皆、草のようで、

その華やかさはすべて、草の花のようだ。

草は枯れ、花は散る。

25 しかし、主の言葉は永遠に変わることがない。」

これこそ、あなたがたに福音として告知知らされた言葉なのです。
(下線部;筆者)

教会の三大祭日は、降誕日(クリスマス)復活日(イースター)と聖霊降臨日(ペンテコステ)です。降誕日は12月25日と固定ですが、復活日は春分の後で最初の満月の次の日曜日、聖霊降臨日は復活日から50日目の日曜日と定められた移動祝祭日で、毎年変動します。降誕日のように、日付が固定であれば分かりやすいのですが。復活日と満月に密接な関係があり、それ故に日付が移動します。

イエスが弟子たちと最後の食卓を囲む場面を、過越の食事(マタイ26章17節、マルコ14章12節、ルカ22章8節)として、旧約聖書に記された過越祭とイエスの死が関連付けられています。過越祭の起源に関する記述では(出エジプト記12章)、傷のない一歳の雄羊を(5節)この月の14日の夕暮れに屠り(6節)、その血を鴨居に塗る(7節)、家に塗った血を見たなら過越す(13節)とありこの月の14日が満月で、その月光に照らされて鴨居に血が塗られているかを見分けたのです。満月の光は、奴隷の地エジプトからの解放と自由の徴である雄羊の血を照らす重要な働きを担います。

「キリストが、わたしたちの過越の小羊として屠られた」(コリント一5章7節)というキリスト教徒による過越祭の解釈から、復活日は春分の後で最初の満月の次の日曜日に祝うことになったのです(325年ニカイア公会議)。イエス・キリストご自身が、私たちの罪を贖う過越の小羊として屠られ血を流されたのなら、その血を自身の内に塗り記すことが求められます。それを踏まえると、復活日を単に主イエスが十字架の死を克服したという理解で止めるのは不十分です。

冒頭に紹介した聖句も、実はこれまでの記述と関連しています。ペトロの手紙一は「イエス・キリストの使徒ペトロから、…各地に離散して仮住まいをしている」(1章1節)、「共に選ばれてバビロンにいる人々と…」(5章13節)とあり、アッシリアとバビロニアによって捕囚の憂き目を経験し、現地に寄留した子孫も視野に入れています。この1章は、同じ内容を「言い換え」で強調する手法が多用されており、「新たに生まれた」は「あなたがたが先祖伝来のむなしい生活から贖われたのは」(18節)、「朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変わることのない生きた言葉」は「きずや汚れのない小羊のようなキリストの尊い血による」(19節)の言い換えです。また、24節～25節はイザヤ書40章6節からの引用で、バビロニアからの解放を告知する場面です。神は、いつの時代にあっても地上の権力で他民族を拘束し、虐げる者から神の民を贖い解放と自由を備えて下さるのです。私たちも、現実の中で思考が束縛され、現状維持に止まっていないか。神の変わることのない生きた言葉、エルサレムの心に語りかけた(イザヤ書40章2節以下)、「解放と自由」への旅路に招く言葉です。私たちはその言葉を心で受け止め、自らの意志で「解放と自由」への旅路を歩みたい。